
忘崎さんの心理学入門・実習編（一年次必修）

シラカベヒロ氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘崎さんの心理学入門・実習編（一年次必修）

【Zコード】

Z7006T

【作者名】

シラカベヒロ氏

【あらすじ】

心理つてさ、単体でも難しいのにね、それが学とデッキングしちゃうんだもん。学だつて単体で難しいのに。いくら入門つて言ってもねー、全然入門出来ないよね。

pixivにも投稿済み

「うわ間違えた! と気づいたときには遅かった。

「あ、ごめんね急に呼び止めて。あのさ、あのー、今度の日曜つて空いてるかな。あのー、もしよかつたら、一緒にそのー、『じはんとか、行かない?』

みたいなことを言いたかったのに、実際に僕の口から出たのは、「付き合おう」

というありとあらゆる過程を全部すっ飛ばした、ビストレートな言葉だった。

三限、心理学入門が終わつた直後の三〇三教室。

受講者十数人、マイナス一人（僕）、プラス一人（教授）が、じつと僕を見ていた。目の前、僕がダイレクトアタックをかましてしまつた相手、忘崎さんもじつと僕を見ている。じつと、まっすぐ。

沈黙。

見つめ合つこと、十数秒。

彼女の唇が、じわっと、ゆっくり、開く。

「ここにちはー」

「え、あ、ここにちは」

すごいタイミングで挨拶された。

「えつとー、ハ々坂くんだよな?」

「あ、うん、そうだよ。ハ々坂」

「髪切つた?」

「あ、うん、切つた。おととい」

「へー、そつかあもう夏だもんね、短くしたほうがいいよね」

「そうだね、夏だしね」

「ねー。私もばっさり切つちゃおうかなあ」

肩まで伸びたふわふわの髪を指先でくりくりいじる忘崎さん、のふわふわの柔らかい笑顔を見て、あーやっぱ可愛いなあ「好きです

うわ言ひちゃつた！うわ！頭が真っ白になる。僕はあれが、考えるそばから全部つるつる口に出ちゃう「ところてん脳か」うわ！また！頭真っ白の更に上、頭透明になる。あーえーあーえーと壊れたラジオみたいに一定の音を立て続ける僕の喉。その音を遮るように、「ね、ハタ坂くん。一緒に~~昼~~はん食べよ、これから忘崎さんが目を細め、微笑んだ。

「あ、はい」

僕は敬語を使つた。

* * *

で。

僕らは、今、電車に乗つてゐる。なんで？ つて訊かれてもわからぬ。僕のほうが訊きたい。~~昼~~はん食べようつてことだつたら当然食堂に行くんだろうと思つて忘崎さんについていく形で並んで歩いてたら彼女はなんとかふわふわーと大学を出ちやつて、え？ と戸惑いながらついて行くこと徒步十数分、僕らは駅に着いた。「切符私一緒に買つから大丈夫だよー」と忘崎さん。

「あ、ありがと」
と僕。

それで、今、電車。どこに向かつてゐるのかわからぬ。
隣を見る。

忘崎さんの横顔。

ここにこしながら首をゆつくり左右に揺らしながら、窓の向こうに流れる景色をじーと見ている横顔。思わずぼんやり見とれてしまう。だつてこんなに近くで彼女を見たのは初めてだ。

僕と忘崎さんは一週間でただ一度、金曜三限社会心理学入門のときだけ一緒にクラスになる。いつも僕は少し離れた席から、彼女をちらつちらつと見ながら授業を受ける。喋つたこともほとんどない。

お互いの下の名前も知らない。そんな距離感。それがどうだ、今この物理的な距離感。近い。可愛い。可愛すぎる「好」危ない。言いそうになつた。咄嗟に舌噛んで止めた。危ない。

「ハ々坂くん」

「え、あ、おひ」

急に呼ばれてびっくりし過ぎて変な返事をしてしまつ。けだし、志崎さんはなにも気にせず喋る。僕のほうは見ず、まっすぐ窓の向こうを見ながら。

「心理学つてなんだひひねー」

「え？」

「私授業いつつも何が何やらで、へへ、ハ々坂くんは？」

「僕？ そうだなあ、うーん、まあ、あんまり、実は」

「そうだよね、難しいよね！ 心理つてさ、単体でも難しいのにね、それが学びドッキングしちゃうんだもん。学だつて単体で難しいのに。いくら入門つて言つてもねー、全然入門出来ないよね」
結構饒舌に喋るんだなあ、と思いながら僕は聞いていた。もっとほわほわした人かと（勝手に）思つてた。と、アナウンスと共に電車が停車する。

「着いたよハ々坂くん」

「え、あうん」

立ち上がり、笑顔ですいすい一つと電車を降りる志崎さんの後を慌てて追う。大学の最寄り駅から三つ隣りの駅だった。

* * *

「冷蔵庫の中に入つてるもの言いまーす。お水とウーロン茶と麦茶とビールとウーロン茶。どがいいー？」

「あ、えーと、むぎ、えーと、ウーロン茶で」

「はーい」

ウーロン茶だけ一回言つてたからよくわかんないけどイチオシな

んだろうと思い、選んだ僕だった。あとまだ二十歳じゃないからビルは飲めない（忘崎さんつて年上？）。

少し腰を上げ、お尻の下に敷いたクッショングの位置を手でもぞもぞと直しながら、それとなく部屋を見回す。カーテンとかカーペットとかラックとかベッドとかとにかく全体的に薄い青色で統一された部屋。落ち着いて清潔感のある爽やかで清楚で綺麗でフレッシュな、で、しかもほのかに、何だかわからないけど甘くて清涼感があつて簡潔に言うといいにおい、ああそう、言うところのシャンプー的な香りがほんのり、本当にほんのりだけど漂っている。絵に描いたような女の子の部屋。うわ！ 僕女の子の部屋とか上がるのもしかしてこれ初めてだ！ と気づいてますます落ち着かなくなり、少し腰を上げてクッショングの位置を手でもぞもぞ直して座る（一回目）。それをもう一度繰り返す（二回目）。

ここからは見えないけど、キッチンのほうで今、忘崎さんが何やら鼻歌（鼻歌つていうかラララーとか声に出してるのでや口歌）を歌いながら、何かしている。鼻歌の合間合間にかちやかちやガラス的な音だつたり食器的な音だつたりが聞こえる。うわ！ なにこれ付き合つてゐみたい！ と思って飛躍的に落ち着かなくなつてきて僕は立ち上がり意味なく窓の傍まで歩み寄り、意味なく外の景色を眺めてみたり。ここは六階。結構高い。前の通りを車が何台も何台も。向かいのマンションの一階はファミマ。ファミマの隣はレンタルビデオ屋。そつかー便利だなあー。そつかー。そつかー。全然落ち着かない。

「ここつてさー、あの、家賃つて、どのくらいなのー？」

間を持たせるためだけの質問を見えない忘崎さんに投げかける。

「家賃ー？」

「うんー」

「高いよー」

「あ、そつかー」

会話が終わった。

それにしても、忘崎さんがいない一人の空間でこんなに間が持つてないのに、忘崎さんと一人になつたら一体全体僕はどうな「はい、お待たせー」背後から声。思いつきりびくつをしてしまった。恥ずかしい。頭がくらくらする。すうー、と小さく深呼吸して振り返る。田の前に、エプロン姿の忘崎さんが立つていた。笑顔で。カレーライスの入つたお皿を両手で持つて。

「はいハタ坂くん、お皿はなんだよ」

「新妻かお前は」うわー！お前とか言つちやつた！おい！脳みそおい！

「はいどうぞ、おかわりもあるからね」

忘崎さんはなんにも気にしてない様子で、カレーの入つた皿を僕に差し出した。戸惑いながら彼女を見る僕。「ぐ、と小さく首を傾げる彼女。「可愛さの魔物かお前は」うわー！「あ、ウーロン茶忘れちゃつた、持つてくるねー」ててて、と出でいく忘崎さん。自分の脳と口が本当に信用出来なくなつてきた。汗が止まらない。ふわ、と鼻先を掠めるカレーのにおい。いいにおい。うーん。とりあえず、食べよう。あ。

「忘崎さん、あのー、スプーンないんだけど」「手で食べてー」「本場か」うわー！

* * *

なんにも映つてないテレビを見ながら、無言で、手でカレーを食べている自分。あんまりにも現実味がないけど、それよりも、忘崎さんの部屋で忘崎さんの隣で忘崎さんの作ったカレーを忘崎さんと一緒に手で食べてるつことのほうが現実味がない。

ちらりと横を見る。

忘崎さんは、いわゆるお姉さん座りでぺたんと座り、田の前のなんにも映つてないテレビを見ている。ウーロン茶のペットボトル（

「リットルのでかいやつ」を両手で持つて、じくじく飲んでいる。カレー食べた手を拭いたりせず直で持つててるからペットボトルはべとべと。ついでに「う」とコップとか持つてきてくれてないから、忘崎さんも僕も、ウーロン茶は飲み口に直接口つけて飲んだ。間接キス。いやでもね、大学生ですから、そのぐらいで今さらテンション上がつたりドキドキしたり「直接キスしたい」なんかもう、自分の脳と口に対してびっくりしなくなつてきた。

「じゃあキスする？」

「あはは」

と意味なく笑つて、少し冷静になつて考える。え今誰？『じゃあキスする？』って言つたの誰？

「する？」

ゆつくり、隣を見る。

忘崎さんが僕をじつと見てくる。じこじこしながら。

え？

「それ、え？」

「ん？」

「キス？」

「キス」

「え、いいの？」

「なにが？」

「しても」

「え、うん」

「え、なんで？」

「え、だつて」

忘崎さんが、お姉さん座りのまま、膝を使って歩き、よいしょよいしょと僕に近寄つてくる。体温がわかりそなぐらい近距離になる。僕を見つめる黒くてまん丸い大きな目。長いまつげ。つるつる柔らかそうなのが嫌でもわかる唇。が、じわっと、開く。

「キスまでなら浮気に入らないからだよ

「……ん？」

「ちゅうと何言つてんのか全然わからなー。」

「志崎さん、キスまでなら浮氣に入らないからだよって言つた？」

「うん、もう言つたよー」

「え、えーっと……じゃあどこからが浮氣？」

「それはー、うーん、ちゅうと、恥ずかしいから言えないけど、あ

はは、まあ、そういうことだよー」

「あー、なるほど、ちゅうか、なるほど、一線越えちゅうたら浮氣」

「やうやうそれそれ！ ちなみにハ々坂くん的にまだからが浮氣？」

「どうでもいいわ」言つちやつた。『え? じやねえわ』言つちやつ

た。『浮氣つてなんだよ』言つちやつた。『え? 彼氏いるの?』言

つちやつた。『え、ここのの?』言つちやつた。『このの?』言つ

やつた。

「うん、こるよー？」

なんでそんな当たり前のことをへべりこの表情で僕を見る志

崎さん。

三秒ほど停止。

僕は、何をどうしたらいいのかわからなくなつて、意味もなく立ち上がる。志崎さんが僕を見上げた。上目づかいで。可愛い。いやそうじやなくて。

「えーっと、あの、つかぬ事をお聞きしますが」なぜかへりくだる僕の口。僕が、授業のあと、『いたい』と、覚えてますでしょうか

「付き合おう、でしょ?」

「そう、それ、です

「いめんなさい」

「いつの遅え

* * *

帰る前に、洗面所を借りて手を洗つた。洗面台横、洗濯機の上に何やら男物の下着（バカみたいに真つ赤なトランクス）とスーツのズボンが放つてあるのが目に入った。あ、ここもしかして彼氏の部屋か、忘崎さんの部屋じゃなくて、とほんやり思った。同棲？ 家賃も高いみたいだし、彼氏と折半してるのかも。冷蔵庫の中にビール入ってるのも、彼氏のか。なんだか全部繋がつて、すつきりしつつ、その一倍ぐらいもやもやした。

「彼氏って、何してる人なのー？」

部屋でカレー食べてる忘崎さんに、飛ばす必要がない言葉を飛ばす。

「ベンチャーダよー」

ベンチャーフてのは業種じゃないよなあと思いながら、でもなんだか妙に劣等感を覚えた。ベンチャーベンチャー。タオルで手をこつしじし拭く。手を嗅ぐ。全然まだカレーくさい。絶望。

洗面所を出ると、忘崎さんが立っていた。

「洗つた？」

「うん、洗つた」

さつきまで僕の隣にいた忘崎さんは、なんだかまるで別人に見えた。

「えつと、じゃあ僕、帰るね、『こちあわせ』」

「うん、こちらこそ『こちそうさま』」

もうその返事、全然意味がわからない。というか思い返せば忘崎さん、ほぼ全部全然意味がわからない。なんでカレーを手で食べるのか。なんで僕を彼氏の家に上げたのか。なんで告白したその場で返事をくれなかつたのか。なんでお茶飲むのにコップ持つてこないのか。なんでキスは浮気じやないのか。「ほんと意味わかんない」言つちやつたけど、もう僕は全然気にしない。

じーっと、彼女を見る。

彼女は、ん？ と首を傾げながら、じーっと僕を見返す。キス、してやろうか、と思つた。

けどやめた。

「それじゃ」

ふいっと手を振り、靴を履き、鍵を開け、玄関を開ける。夕方の
あらざらした日差しが、滑り込むように射し込んできた。

「ハタ坂くん、また来週、心理学入門でねー」

後ろから声。

振り返らず、僕は後ろ手で静かに扉を閉めた。

「てか難しそぎるだろ心理」

まあまあでかい声で言っちゃいながら、僕は歩き出す。

来週の心理学入門は一言一句逃がさずノートとつてやろう。僕は
なんだかわくわくした。「してねえよ」「ああ、言っちゃった。

(後書き)

「純愛もの」「人が死なない」「強気つ娘が出てこない」というお題を頂き、書いた短編です。

それ以外にも、「中学・高校を舞台にしない」「SF的事件・設定を入れない」「ハッピーハンドにしない」というような縛りを自分で入れてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7006t/>

忘崎さんの心理学入門・実習編（一年次必修）

2011年5月31日09時55分発行